

御妙 法返 尼御 事前	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃
弘 安 四 年	〃	弘 安 三 年	〃	弘 安 二 年	〃
六 〇	〃	五 十 九	〃	五 十 八	〃
二、〇八九	一、九八一	一、九六四	一、九〇三	一、八九七	一、七五六
三十卅八	廿九四	廿八卅六	廿七卅七	廿七卅二	廿五十四

### 三熱の炎と偉大なる暗示

荒 木 經 明

以上<sup>ハ</sup>即身成佛論ノ文證ト見<sup>ルベキモ</sup>也中<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>天台附  
 順佐前ノ御作<sup>アリ</sup>在島本意顯發ノ御著作<sup>アリ</sup>佐後流通還  
 昔ノ作<sup>アリ</sup>而<sup>シテ</sup>又對告衆<sup>ニ</sup>隨<sup>テ</sup>內證外用一途<sup>ヲ</sup>テラザル<sup>アリト</sup>雖  
 要<sup>スルニ</sup>當家<sup>ハ</sup>成佛<sup>ヘ</sup>十界所有<sup>ノ</sup>當相<sup>ヲ</sup>本覺<sup>ノ</sup>眞体<sup>トスルニ</sup>  
 結歸<sup>スルニ</sup>在<sup>リト</sup>可謂<sup>也</sup>  
 然<sup>リト</sup>雖諸先哲ノ議各々異点有<sup>之</sup>大<sup>ニ</sup>研鑽<sup>スベキ</sup>義門<sup>ナリ</sup>  
 吾人<sup>モ</sup>又時<sup>ヲ</sup>得<sup>テ</sup>自己<sup>ノ</sup>見解<sup>ヲ</sup>發表<sup>セシ</sup>事<sup>ヲ</sup>期<sup>スト</sup>雖<sup>モ</sup>今<sup>ハ</sup>唯  
 先<sup>キ</sup>學師<sup>カ</sup>余<sup>ニ</sup>授<sup>ケ</sup>ラレシ成佛論祖判文證類集<sup>ヲ</sup>提<sup>グ</sup>ル<sup>而</sup>  
 己<sup>之</sup>以<sup>テ</sup>斯道攻究者<sup>カ</sup>鑽仰<sup>ニ</sup>一助<sup>ヲ</sup>ラバ<sup>シ</sup>吾<sup>ガ</sup>意<sup>既</sup>コ満足<sup>シ</sup>

現實の吾々の生活を考へて見れば、全く手も足も  
 出ない様に迄威容を失墜せられ、而かも、其中に  
 自己の生活を、少分でも完全に、若しくは、幾分  
 でも不満なく送つて行かんとして東西に急ぎ、南  
 北に走り焦慮すること他その見る目もいたましい  
 くらいである。其中に高貴の人あり、賤之男あり

賤え女ありと、夕に月を眺めて、觀念の床の上に夢を結び、朝に星を頂きて、行く所あり、歸る家ありて、其營む所は何事ぞや。昔より今に至る迄生死の九界に輪廻する事の、但に常住ならんのみを思ひて、無常の理を知らずして、生を貪はり、利を求めて、止む時なく、殺風景な冷談な、そして又物騒な生活を、誰しも經驗しながら、表面には信義を誓ひ、友愛を示して、御互に睦しきが如く、共同し、組合して、文化生活の理想を技術的に、虚飾的道德的に、美的展開しつゝ、あるは、何の意義があらう乎。文明とは申し乍ら、宛然強食弱肉の時代とより、考へられない。斯かる複雑多難な、そして厄介な生活を、人間が、必要で造つたとは、何うして考られよう歟。

吾々の生活に於ける、總での活働即ち實踐的行爲も、哲學的權威ある思索にしても、無明深重の雲引き覆いたる、催眠的惰性を消失して、微妙なる我身の内に、三諦即一一心三觀の曇りなき、澄めらる月の眞實智を直觀して、必然的な本然の性、そ

れ自身の、自發的庭園を作るに非ざれば、餘に餘に憑もしき、菩提の素懷を、深刻に謳歌する、社會運動即ち完全なる生活を、建設したとする事は出來ないではなからう歟。

吾々は如何なる場合にも、文明の高い理想を、持つて居なくてはならない、けれども、生活の手段の爲めに、囚はれて、人類の本然性に、暗黒と虚偽を、體認しては、吾々の生存意義を示す生活は、蹂躪され、創造は破壊され、自由は掠奪され斯くして人類は、悲惨なる運命に陥ちいらしめられて、生活の根底を崩し了るであらう。生活は、例へば流る、水の如くである。彼れは無窮に流動し、寸時も滯る事なく、一刻一刻と不斷に新らしい所の、遠き未來の發展の爲めに、一躍一動して流れて止まる事なし。此れと等しく、吾々の生活の生命は、停止する事なく、何處より來り何處へ行くか遮止する時なく、流轉し、今日は昨日より現狀に缺陷不満を感じ、弱々しい生よりもよき生活に、絶へず憧がれ、絶えず向上發展して、

時々刻々事々物々、影響を受けて、今日の生活は全く明日の生活でないと言ふ程、時には向上すれども、多くは病的に流れ行き、生活其者に永遠に杞憂の難船を認識せしめるは、眞に驚異せざるを得ない。それ故に、生活の手段に囚はるれば、眞の生活の本然の性は見出されずして、遂に價値なき生活に傾かざるを得ない。されば生活本性の、内外相互的關係を無視して、人類生存の内面的把握を、意識せられ様乎。

人間の本性的發達を伴ふる、社會運動即ち、生活内容が、豊富なり、複雑に高まる新形式なり、社會状態の改變なり、組織經濟的革明なりの其者が、全く人類の本性的高上に非ざる時は、贅澤と快樂とを追ふ發展となり、虚榮に懂かる、傾向を持ちして、人間の眞の理想生活をして、様々な迷妄と矛盾と混亂を來らしめて、幻滅の悲哀に遭遇し、破滅の生活を招くのであらう。所謂の現在見る様な、虚飾的で俗惡で無趣味な、大仕掛けの投機的社會運動と成り、漫然と民衆の生活に、種

々の方面から、壓迫を蒙むるに至りし其れの如くである。

斯くして、惱みなき人は無く、壓迫より逃れて心途醒酪の光りに照されて、希望の力に蘇生せんとして、藻掻き、自己の存在の意義と價値を、贏ち獲んとして、非常に複雑なる生活の地平線上に熱誠を振つて、本然の性の表現を、自己心中に獅子吼するに至るならん。

如斯之經路よりして、生の充實を計り、人生の意義を甲斐あらしめ様とする者は、其目的を果す生活の上に、勞力と費用と時間とを活用せんとして、我れに自由を與へよと叫んで、其價値を、自らの暴虐より救ひ求めんとするならん。寂かに寂かに心の奥底に、耳を傾けなば、期待に背かずして、如斯之響きを、奏する事必然たるべし。

多くの人類は、一期空しく修する事の善なくして、三熱の炎に交り、單に生活の勢望に得失止む事なくして、惑ひの上に酔ひ、酔の中に夢を結ぶは、風の前の燈籠につたう權華の、日影を待つと

等しければ、哀れともいふべし。

豫期して、事實生存の意義は、内的自覺に據りて、其要求は高められ、そして愛や慈悲や正義や同情や理性を伴ふて、人間は密接の比翼の鳥、連理の枝のその如く、人々は生活の上に、幸福と平和と一致とを樂しんで、暮す事が出来る筈であるに、奇怪なる社會運動は、非常なる懸隔を齎らし來り、徒らに慈善とか、救濟とかの美名の下に折衷的な妥協的の指導にて、侮辱を與へ、阿鼻大城の炎の底に、沈めしめ行くは、不思議ともいふべし。

今や社會の所有の者は、生の歡喜に浴する事が不可能となりて、新生命に懂がれつ、生みの苦しみを、未だ嘗つて見ざる程の、非常の勢を以て渦巻き返つて居る空前の哀史の中に、見出しつ、あるなり。それ故に、新しい燃ゆる様な、民生雜新を高調し、合理的歸着点を、鐘の如く鳴り響かさずして、冷淡に了る事が出來得様耶。

吾々は生活の不安と動搖を破つて、立つべき方

針を確かめ、そして不純なる衝動や、欲求を抑壓して、伸張發展を實現せしめたい。其價值判斷を組織せしめる者は、信仰に抱かれたる、人類の内在的本然の性、其者を確立せしむるに限ると、思索せらる、なり。全く自己の内面的に生ける生命は、社會運動のそれに、徹底的に解決を、把握せしめる萌芽として、見るべきなれど、其實質を充たし行く力が、金剛不壞に非ざる場合に於ては、必ず必ず、急激の誠心誠意なる、果を結ばしめ、恰かも浮萍の如き生活として、奇しき社會運動の止む時なく、續き行く現今の社會狀態を考察せしめる事とならん。

先づ毎自作是念の意を以て思索するならば、生存の彌よ彌よ偶然でなく、生氣ある活力ある要求を、認識するなれど、然らざる時は、段々と底の方へ沈澱し行く生活に呪はれて、到底救ふべからざる道を展開しての曉に至りて怨むとも、何かせん、心すべき也心すべきなり。

翻つて社會運動の上に、新文明を建設して、日

の本の大命を奉すべき、人々の奥底を觀察するならば、陽炎の如きには非ざる歟。所謂る軍國主義の哲理を、一度は謳歌し、續いて民本主義に走り露國の革命の起るや、其根本思想のカールマルクスの思想を崇拜し、而かも今日此頃は、其思想が内心満足する事を得ずして、ラッセルや、クロボトキンの自由の哲理を掲仰して、止む所なく、ばつばつ宗教改革の運動に、乗り出して、精神的へ精神的へと、變遷して來る者來る者に、片端より服従させられ、盲従せしめられて、省みる事なく遊牧の民のその如く、次から次へと移つて、而かも本覺の栖を建設せんとするは、永遠に本然の性に、瀕したる呪はれた、社會運動よと、涙ぐまざるを得ず。

所有る者よ、汝が殘酷と矛盾を伴ふて、呻きを聞かしむる時に、日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如き、絶對權威と尊權を以て、苦しみのどん底より、引き上げ様とする、毎自作是念の御手を示して、汝の實踐的生活に、著るしい反省を、促

がしたならば、其處には必ず、各個の本然の性の空虚が見出され、現實生活の惱みを、確實ならしめて、初めて、深刻な自覺と、嚴肅を喚び足して恒久平和の、眞摯なる運動により、完全なる本覺の栖を、建設せんとするに至るべし、斯くして浮萍の如き生活は、如何ともする事不可能となり、自滅に至らん。そして吾々の、此複雜極まる實踐生活の、過程其者に、究極の價値を見出して、法性の空に、雲なく、實相眞如の月を浮べて、最高純粹の寂光的生活が、顯現されて、人類生存の意義が、表せらるゝに至るべし。

昔日二陣三陳と和黨共續けよかすと叫びし、日蓮上人は、絶對光明を以て、照すべき宗教の、本質的信仰を、所有る社會運動の、根底に潜在せしめて、社會の發達と俱に、人類存在の意義を、全たからしめる生に、徹した叫びを高調したる人格者なり。されば、日夜朝暮に此信仰の叫びを體して、吾々の心性の雪を拂ふならば、本源的生命の實相は、開展され、永遠に生くべき、大なる暗示

は與へられん。冥想思惟して信奉せば、其竹膜たるや何處にか消失し、幻滅悲哀の生活は、斯くして、微妙莊嚴に建設され、悦ぶべき現象は、表現さるゝならん。

## 布教傳道の規範

川 口 智 隨

聖愚問答抄云「佛法を弘通し群生を利益せんには先教機時國教法流布の前後を辨ふべきものなり所以は時に正像末あり大小乘あり修行に攝折あり」云云如說修行抄云「凡そ佛法を修行せん者は攝所二門を知るべきなり攝折二門を辨へずば争か生死を離るべきや」云云上の御妙判に於て明なるが如く吾々佛法を弘通し群生を利益せんと欲せば須く教機時國教法流布の前後を辨ふべき也、何とならば時代は人を造り人は教法を左右するの言葉の如く教は機に依つて顯れ機は時に従つて進退あり時は國に依つて異なり國は教法流布の如何に依つて進退あり即ち五綱に依つて時代に於ける利害得失を精

究し以て思想の遷移を大觀する方法なれば也、今は時既に末法なり法は實教即法華經流布の時也修行は攝折二門の中には折伏の時也何ぞ手を束ね等閑に附するの時に非ざるや、宜しく聖祖の「日蓮先かけしたり和黨共二陣三陣と續きて加葉阿難にも勝ぐれ天台傳教にも越へよかし」云云又「相構へ〜て力あらん程は謗法をば攻めさせ玉ふべし」云云と激勵し玉ふ聖判に奉遵し攝折二門を適宜に應用し三大秘法の妙策及五個の宗教の利鋒を以て早く天下の謗法の罪を伐て頓に海内統記之望を遂げ萬法萬年廣宣流布に奮勵せざる可からず之れ吾々聖祖門下の義務にして又責任なり然れば吾々は須く五綱及攝折二門の意義を体得すべきなり、攝折二門は弘經の方法宣傳の要規也故に二門撰擇の當否は忽ち宗門の勢權教風の發揚盛衰浮沈に關係するものなれば本化門下は須臾も忽諾に附すべからざる最大重要問題也、今略して二門の意義を辯せば地体攝折二門は愛の結塊にして何れも大慈大悲の外なきなり、折伏は大慈にして與樂也即ち